

人口 140 人程度の硫黄島に、未就学児は 3 人。今回はその 3 人の健診 診察のために海を渡った。私自身は先生が母親と話をしている間子どもたちと遊んでいただけであったが、母親のことばを聞いていると、やはり小児科医がいないことに対する不安が大きいように思った。熟練した小児科医と成人を相手にしてきた一般医とでは視点が大きく違うことは明白であるが、それが患者さんにも伝わるのだろうか。また、これまで考えたこともなかったが、「もしものときに駆け込む病院がない」という不安を抱えながら育児をしていくことほどストレスフルなことはないのかもしれない。小さい頃怪我をしてはよく病院に行った自分のことを振り返ると、それがいないことに対する親の心配は底知れない。本土に住んでいるとは実感できない感覚である。もちろん医学的に考えても、成長・発達の著しい乳幼児期に定期的にプロの目で異常がないことを確認することは非常に大切である。短期間のうちに劇的な変化を遂げる時期なので、少しの発見の遅れがその子の予後に大きく影響を及ぼしうる。

このような点から考えると、今回のような定期診療を行うことは非常に重要だと思う。一般的に「離島医療 = 大変」というイメージが強いように思うが、それでも離島に住む人々がいる限りそこに目をつぶるわけにはいかない。考え方によっては、普段忙しく病棟を走り回っているドクターにとってはいいリフレッシュの機会になるとも言える。ゆっくりと流れる時間の中で、患者さん一人一人とじっくり向き合うことは市内の病院では到底できることではない。そのような診療を行うことは患者さんの満足度が上がるだけでなく、ドクターとしての自分の存在や考え方を見つめ直したり、忙しさに追われるあまりに忘れてしまいがちな「人と人とのつながり」「疾患ではなく人を診ること」など、もっとも大切なことを実感・再確認したりできる絶好の機会かもしれない。

私は海や自然が好きなのでもともと離島医療には魅力を感じていたが、今回の経験を通して、改めて人々の生活にとっても近いところで医療ができることの面白さや、やりがい垣間見ることができた気がする。今後もこのような機会があれば積極的に参加して行きたいと思う。この度はお誘いいただき、ありがとうございました。

